



紙の大きさは、どうやって決められたの

1929年に、日本標準規格が定められた

わたしたちが本や雑誌を見ると、いろいろなサイズ(寸法)があることに気づきますね。教科書、まんが、週刊誌などに、いろいろなサイズが使われていますね。

日本で、最初に紙の標準寸法が決められたのは、1929(昭和4)年に、当時の役所の商工省が、日本標準規格(JIS)で、紙の仕上寸法を公表したことに始まります。

それまでは、日本で古くから使われてきた四六判とか、菊判という寸法が使われてきたのです。しかも、紙を切って、一定の寸法に仕上げるときに、寸法が統一されておらず、ばらばらでした。

日本標準規格では、原紙の標準寸法として、A列とB列の2種類を定めました。さらに、仕上寸法として、A列、B列ともに、0番~12番を決めました。

A4とか、B5というのは、A列の4番、B列の5番という意味です。

この規格を統一するにあたって、外国の規格を参考にし、A列は、ドイツの規格をそのまま取り入れ、B列は、日本独自の寸法を作ったのです。現在では、日本工業規格(JIS)に改められています。(監修・青木 国夫)

紙の仕上寸法 JIS (日本工業規格) (単位mm)

番号	A 列	B 列	番号	A 列	B 列
0	841×1189	1030×1456	6	105×148	128×182
1	594×841	728×1030	7	74×105	91×128
2	420×594	515×728	8	52×74	64×91
3	297×420	364×515	9	37×52	45×64
4	210×297	257×364	10	26×37	32×45
5	148×210	182×257			

